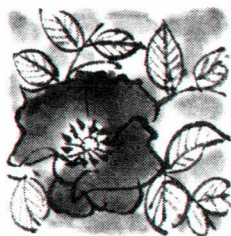


秋元有子

いりみち

新日本出版社

秋元有子
はりみち



秋元 有子（あきもと ゆうこ）

1932年東京に生まれる

本名 山中郁子

日本民主主義文学同盟同盟員、参議院議員

主な著書『海へ——小説千代田丸事件』（日本青年出版社）、『働く婦人と政治の革新』（新日本出版社）

はりみち

1980年1月30日 初 版

定価 1200円

著 者	秋	元	有	子
発行者	松	宮	龍	起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発行所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電話 東京 (478) 3311 (代表)

振替番号 東京 3-1 3 6 8 1

印刷 光陽印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

目次

みどり児よ	5
二十一年目の雪	33
立体交差	47
胸の花	89
波間より	115
双柿の宿	149
灼ける	163
はりみち	213
あとがき	321

装丁
小島和夫

は
り
み
ち

みどり児よ

「幸ちゃん！ 幸ちゃん！ どうしたの。幸ちゃん！ 返事して、お姉さんよ。返事して！」

三歳になる幸生は、いつもまわらない舌で、おねえーちゃん、おねえーちゃんと圭子になついていたのに、いま圭子の目の前で死んだようにぐったりと手足をのばして横たわっている。

夢中になって幸生を抱きかかえようとしてかがみこんだが、圭子は手を動かすことができなかった。

幸生の身体は、みる間に青くなり、いつのまに裸にされたのだろう。まるまるとふとっている筈だった手足が木の枝のようにやせ細って、老人のようにしなびたまま、やがて黒ずんできた。

「誰か！ 誰かきて！」

大声をはりあげたつもりだったが、声はでなかった。

「アッハッハッハ……」

突然圭子のかたわらから異様な笑い声がおこった。

幸生をだきかかえようとしてかがみ込んだまま、身体が硬直したようで首も動かせないのに圭子は、その笑い声が労務課長の柿崎であると知った。

そしてその背後に、労務課員の松原の、ふとったあから顔や、庶務係長の井川の白い顔や、組合役員の川本の嘲笑うような顔がのぞいているのも見えた。

（あんたたちが殺したんだ、あんたたちが幸ちゃんをこんなにして……さあ返して！ お母さんが帰ってくるまでに幸ちゃんを元通りにして返して！）

ありったけの憎悪をこめて、叫んでも、それは声にならずに圭子は次第に息苦しくなり心臓ばかりが、急に激しく波打ってきた……。

二月のあけがただというのに、圭子は、びっしょり汗をかいて、床に起きあがった。心臓はまだ夢の続きのように、激しく打ち続けている。

（夢でよかった）

心底、圭子は生き返った気持ちで、枯木のような幸生の手足がみてる間に黒くしなびていった悪夢をふり払うように押し出された涙を拭いた。

今日、幸生がちょっと風邪気味だけど、休暇があまりないから………といって、託児室へつれてきた母親の沼井厚子の言葉が圭子の心の隅に残っていたのだろう。

（それにしても、もしや幸ちゃんの具合が悪いのじゃないかしら……）

あまりに古風な老人じみた妄想を真面目につなぎあわせはじめると、圭子はもういても立ってもいられなくなって、時計を見た。

五時に少し間があったが、外はわずかにしらみかけて、朝の早い厚子の住んでいる母子寮を思った。

もう誰か起きているだろう。

夢からさめたばかりの冷静でない心理状態も手伝って、圭子はダイヤルをまわした。

ベルが鳴り始めると、もうおきていたように年配の女の声がすぐ出たが、厚子がでるまでには、かなり間があった。

(やっぱり幸ちゃんの具合が悪くて大さわぎをしてるのかしら?)

呼出しを待つ間も、圭子は苦労性の年寄りのようにああでもない、こうでもないと考え続けた。

「沼井ですけれど、どなたですか?」

こんなに朝早く何事だろうという口調で、厚子の声が聞えた。

「沼井さん、突然びっくりさせてごめんなさいね。私、宮崎です。組合の宮崎圭子ですけれど……」

(アッ……) というような厚子のおどろきがつつたわってきた。

「幸ちゃんどうしてます。昨日風邪気味だったでしょう? ちょっと心配になってお電話しちゃったのよ」

さすがに、幸生が死んだ夢を見たとはいいいかねて言葉をにぎした。

「まあ宮崎さん、あなたそんなに心配して下さったの。ありがとう。何てお礼いっていいか解らないわ。幸生はもうすっかりよくなったわ。あまり熱もでなかったし、気分もいいらしくて今もぐっすり寝てます……」

「何ごとがおこったんだい。今頃……。あまりびっくりさせるなよ。まだ五時じゃないか」

ようやく目をさました夫の陽次が隣の布団から顔をもたげて、寝呆けた声を出した。

「よかったわ。何でもなくて……。託児室の赤ちゃんが死んだ夢見たのよ。急に心配になってお母さんのところへ電話しちゃったの」

「おい、おい、君は……何ということだい。少しノイローゼじゃないか。いくら責任感の強い婦人部長かしらないが、こんな朝っぱらから電話して正夢かどうかたしかめるなんて正気の沙汰じゃないぜ」

陽次は呆れたように圭子の顔をみた。

「そうね。今になってすっかり目がさめたら何だか馬鹿げた気になったけれど……。さっきは夢中だったわ。だって幸ちゃんが、目の前で動かなくなっとなびちゃったのよ。労務の連中が、大声で笑っていたわ。そらみろ、子供が死んだのはお前たちの責任だぞ。だからいったじゃないか。設備も不十分な仕事場に育児室を作るわけにいかない、って」

組合役員も一緒に笑っていたとはいえなかった。

圭子が働く電話局は数千人の電話交換手がいる婦人の職場の代表のような場所であったが、それまで一度も託児施設が設備されたことはなかった。

山と積まれた妨害をけて、労働組合が職場の中の休憩室に実力で託児室を作ってから圭子が考え続けたことは、赤ちゃんに事故をおこしてはいけないということだった。

（とうとうこんな夢をみるまでになってしまった。本当にノイローゼにならないようにしっかりとては……）

思いつめたような表情で、沼井厚子が、よちよち歩きの男の子をつれ、おずおずと組合事務室のドアをあけて、圭子をたずねたのは前の年も押しつまって十二月に入り、労働組合が、年末手当の交渉に忙しい頃であった。

「夫はこの子が生れてから一年たった時に交通事故で死にました。私たちは母子寮に入っていますが、子供をみてくれていた母親が急に病氣になつて働けなくなつてしまつたのです。仕事をやめたら生活して行けなくなりまして……。職場委員の浅原さんに相談したら、組合でも、託児所設置の要求をしているから、行つてみなさいといわれてきたのですが、託児所はできる見込があるのでしようか」

自分と同じ年頃のまだ若いおとなしそうな厚子が、夫に死別し、子供をかかえて母子寮で生活しているということは、安い給料ではあつても夫と二人で何とか生活している圭子にとって一つの衝撃だった。

「圭子さん、いる？」

大声で元氣に事務室にとびこんできた浅原和枝は、持前の屈託ない表情で幸生を抱きあげて話にわりこんできた。

「ねえ、氣の毒でしょ。託児所のことは前から問題になつてたし。組合の大会でもいつも議論されてたじゃないの。組合の力で託児室を作りましょうよ。日本間の休憩室を一つつづせばいいんですもの」

「浅原くん。あまり乱暴なこというなよ。犬や猫の子と違うんだぜ。病氣になつたりしたらどうするんだい。それに社側がおいそれとは許可しないよ」

自分の席で、和枝の話を聞いていた委員長の畑が警戒するような口調でいった。

「ホラまた委員長の日和見がはじまつた。そりゃ社側が許可することはないでしょ。でも作らなければ沼井さんはどうなるの？ 組合員の要求を獲得するために、労働組合はあるんでしょう。頭からでないときめてかかつちゃ駄目よ」

「浅原くんにはかなわないよ。何でも理屈通り行かないってことが解らないかなあ……」

ボンボンというわりにはカラッとして憎めない和枝に対して畑も苦笑していたが、組織部長の川本は、苦々しい表情で、

「忙しい時に、朝からガアガアやらないでくれよ」

と敵意をみせた。

「ガアガアとは何よ。川本さん。組合の仕事は、組合員のためにあるのよ。沼井さんは、組合を頼ってこうしてきているのじゃないの。失礼よ」

「和枝さん。駄目よ。こんな所ではやめて……。いずれ執行委員会で討議しましょう。私も、遅かれ早かれ実力行使のような形でも育児施設を作って実績をつみあげるよりないと思っただけだ。ただ交渉だけしていても杜側は決して託児所は作らないことはここ一年ぐらいの経過で明らかなのだから……委員長、執行委員会で討議するっていいことではないですかね」

圭子は川本に聞えるように大きな声で畑にいった。

「ああ、そういうことにしましょう。ただし実力行使するかしないかは白紙だよ」

気の弱そうな畑の言葉は、圭子をいらだたせた。

（小さい子供をつれて、こうして組合を頼ってきている人の前で何てことをいうの……。畑さん、あなただって仕方なく組合やっているわけじゃないでしょ。労働者の利益のためにやってる筈じゃない……）

圭子はのどまで出かかった言葉をのみこんだ。

「ほかにも沢山いるのよ。赤ちゃんあずけるところがなくて困っている人。いざとなったらきつと連れてくるわ。産みたくても産めない人もいるし。中絶する人もいるし……」

和枝の言葉に、川本がからんできた。

「自分の責任じゃないか。先の見通しもなくでだらしく産むのが悪いんだよ」
「川本くん、やめろ！」

と畑がどなったのと、沼井厚子がさっと立ち上ったのは同時だった。

畑の大声でワーンと泣き出した幸生を引きずるように、厚子は事務室を出て行った。

川本は顔色をかえて、不貞腐れたように押し黙ったまましばらくして部屋を出て行った。

（あのまま川本さんの話を聞いていたら、何も知らないこの小さな幸生の身体や心が泥まみれになって、引き裂かれるような気がして逃げてきました。委員長が怒鳴って下さったのがせめてもの救いでした。そうでなかったら、私はもう二度と、組合には伺わなかったでしょう）

厚子は後で圭子にそのように話した。

執行委員会は紛糾した。

圭子は婦人部長という立場もあったが、（もう二度と組合に行かないつもりだった）といった厚子の言葉に婦人組合員の組合にかける期待と、裏切られる絶望とが隣合せて不安定に重なっている切実な重みを痛いほど感じて強引に頑張った。

川本のように組合員を敵視さえするような思い上った官僚的な気分になるものと、畑に代表される、当局の出方を危惧する不安な気持の二つの流れが結局一つにまとまるような具合で、圭子は責められて結果になった。

若い婦人の執行委員たちは圭子を支持した。

しかし、三役や組織部長がその気にならないで組合のたたかいはできない。

「当局が許可しないだけでなく、処分をしてきたらどうするか」

「一部の組合員のために、他の組合員が休憩室をとられたり組合費を使われたりする不満をどう押えたいのか」

「もし子供に事故がおこったらどうするのか」

主な反対の理由はそれらのことであつた。

川本はそれに加えて、

「大体自分で生んだ子供の面倒を見きれないで組合に泣き込むなんでもともと間違っているよ」

と相変らず乱暴な言葉を吐いた。

「それでは、川本さんは労働組合が託児所設置の要求をしてるのは間違いだというの？ 私たちの組合だってもう十年以上も毎年要求書出してきたじゃないの。あれは口先だけだったのですか。女性が社会で働くために職場に託児所を作らせようという大義名分は、あなたの論法ではどこかへ消えてしまいます」

冷静に、冷静に、と思いながら、圭子はやはり感情的に川本を追いつめた。

「宮崎くん。そういわずに、具体的に考えよう。問題はやはり人間の生命をあずかる大切なことだ。正義感や同情だけで子供の生命をあずかるわけにはいかないのだから……」

返答に窮した川本を救うように書記長の竹山が助け舟を出してその場をおさめた。

「皆さんは、悪い結果がでることだけを心配して反対なさるけれど、必ず組合員が不満を出すとは限りません。むしろよく話合つて行けば解るのではないですか。婦人労働者がほとんどをしめる私たちの労働組合がこの闘いを機会に婦人が働くという意義を深めあうことは有意義だと思います。それに皆が団結してたたかっても、当局が必ず処分をするとは限らないし、一人あたりにすれば、わずかな負担で保母さんも雇えるのだから……。それより子供をかかえて、明日からどうして働いて行こうか

と苦しんでいる組合員の気持ちをまず大切にしなければならぬ筈です」

圭子の主張は正面切って反対しにくいものであった。

畑は、できることならばこの厄介なたたかいをかわしてやり過したいと考えている……と圭子は感じた。

（それでは、労働組合は、年末手当とか、賃上げとか、きめられた上級機関の指導だけを受けて、おざなりのたたかいをくり返し、本当に労働者の血の流るような要求は怪我を怖れてよりつかないということではないか。そのことは逆に、労働者が労働組合によりつかなくなることであり、役員はほとんど組合員から離れて行ってしまうことではないか）

「宮崎くん。婦人委員会を招集して討議することにしよう。それから、まず当局に直ちに育児施設を設備するように要求しよう」

討議の結論を出すように畑がいった。

大衆討議の中で困難だという結論を出させようとしている……圭子は決して悪意はないであろう畑の言葉さえも、そのように解釈するよりない心持であった。

婦人委員会は、執行部の一部役員の期待に反して、満場一致で、休憩室を實力で使って託児室をつくる方針を支持した。

日頃、川本のとりまきのようにして、ことごとく圭子にたてついてくる二、三の婦人委員が、はじめは川本の意を受けたように、組合費の問題、休憩室の問題などをいいだして何とかきめさせまいとしていた。

「でも、休憩室の問題は、皆に話してみましようよ。納得してくれると思うわ。だって明日はわが身

ですものね」

お腹の大きい瀬川弘子がおどけていうと皆は笑いながら共鳴した。

「それに沼井さんだけじゃないわ。私の職場でも、二人は必ずいるわ。すぐにでも赤ちゃん連れてきたい人が……」

「全局で十人はいてよ。それにもうお腹の大きい人も沢山控えているし、大丈夫よ、やりましようよ。いつまでも交渉してたってちが明かないわ」

「反対の意見いつてる方も、みんなが納得すれば異論はないのでしょ。お互い女同士じゃないの。いずれは母親になって、悪戦苦闘する運命にあるんだもの」

運命という言葉はおかしかったが、三十名近い委員たちは真面目な面持でうなずいた。

圭子とともに委員会に出席していた書記長の竹山は、はじめは乗気でない様子だったが、皆の意見が活発に賛成に表明されると、やはり力を得たように、最後には、執行部も頑張るけれど一緒に皆さんも頑張ってくれと挨拶した。

「よかったわね。圭子さん。やっと託児所闘争の道が開かれるわ。執行委員会大変だったんだって？」

その日の帰り道、浅原和枝が嬉しそうに圭子を呼びとめた。

圭子は、和枝のように手離しでは喜べないひっきりかきがあった。夕方畑が局長によばれて、屈託ありげな顔をして戻ってきたことも気になっていた。

川本があのまま引き下るとも思われない。

「婦人委員会できめただけでは済まないかも知れないわよ」